

真言宗の護摩祈禱の起源は 古代インドのバラモン教から

不浄を焼き尽くし、再生を促す意味を持つ火

遣唐使で中国に渡った空海は、日本に帰国後、朝廷の許可をえて仏教の真言宗を立ち上げました。真言密教では護摩祈禱が有名です。ご本尊は不動明王。

「深川のお不動様」として親しまれている真言宗（開祖は空海）の深川不動は、千葉県成田市の大本山成田山新勝寺の東京別院です。人々の願い事が浄書された護摩木を護摩の火でお焚き上げて祈願する護摩祈禱には多くの人々が訪れます。

消えずの火……火と関係の深い真言宗

日本で一番の燈明信仰の地は高野山だと言われています。奥の院にある燈籠堂（とうろうどう）の、幾千という数の吊燈籠（つりどうろう）は荘厳です。燈明信仰の流れは2つで、一つは832年に弘法大師が行った「万燈万華会」を発端とするもの。もう一つは弘法大師に講じられた祈親（きしん）・白河の両燈です。

この祈親の燈は1118年に燈爐堂に常燈明、つまり消えずの火として灯されたものです。

高野山は994年落雷による火災で諸堂塔が焼失、以後衰退していったものを祈親上人が復興したのです。

上人は大師の前に一燈を献じ、もう一度生まれ代わり、対の一燈を捧げたいと祈念したのです。上人は白河上皇として生まれ、念願を遂げました。

そしてこの二人こそ、弘法大師の生まれ代わりだったとされています。その為、両燈は永遠の生命のシンボルなのです。しかし鎌倉時代に入り、信仰の意義が薄らいだ時に新たな理由づけとして「貧女の一燈、長者の万燈」が考えられました。

今では、1950年弘法大師奉賛会の発会を祈念し高松宮が点したもので、1984年弘法大師千五十年後遠忌に日中友好を念じ、中曽根総理大臣（当時）によって点じられた燈明の計4つの消えずの火が拜殿正面に灯っているのです。

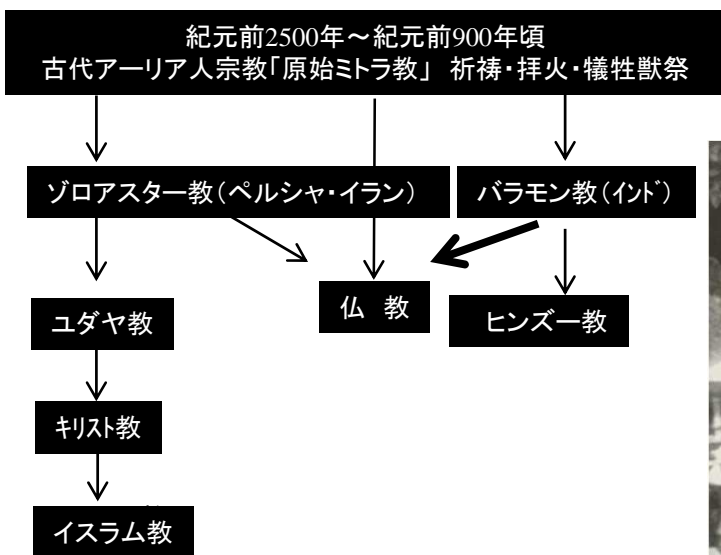


火は光であり、古代ペルシャで信仰されたゾロアスター教は、光の神アフラマズダを象徴する聖なる火を崇（あが）めることから拝火教（はいかきょう）ともいわれました。

真言宗の護摩はサンスクリット語「ホーマ」（焚く、焼く）に由来し、もともとインドのバラモン教で火神アグニを供養して願望成就を祈った儀礼から来ているとされます。紀元前2000年頃にインドで始まり、日本には平安時代の頃に伝わりました。

燃えさかる火炎は不動明王の智慧そのものであり、煩惱を清らかな願いへと高めて成就させる力を持つといわれています。

護摩札は、護摩の火（不動明王の智慧の炎）にかざして力が込められた、不動明王のご分身ご分霊です。神棚や仏壇、目線より高い清らかな場所にお祀りし、毎日不動明王ご真言をお唱えして、諸願成就を祈念する。



比叡山延暦寺（天台宗）。その中核をなす根本中堂に1200年もの間、一度も消えたことがない「不滅の法灯」と言うお灯明がある。毎朝夕に燃料の菜種油を絶やさないように僧侶が注ぎ足し続けているそうだが、気を抜くと燃料が断たれて火が消えてしまう。「油断」や「油断大敵」は、ここから出た言葉であるのだ。油を注ぐのは単純で簡単なことだが、それを1200年もの間ずっと欠かさずに継続することは、とても大変なこと。気の緩みがあってはとても続くものではない。

（ホーマを焚くバラモン教祭司）